

21世紀の生産システムと環境国際会議 [MSET21]

(大阪大学工学部電子制御機械工学科 教授)

委員長 岩田一明

(平成元年度国際会議等開催準備助成 AF-89028)

1. 開催日時：平成2年5月28日～6月1日
2. 開催の場所：京王プラザホテル（東京都新宿区）
3. 開催に対する貢献：
4. 国際会議報告：
 - 1) 国際会議の名称 21世紀の生産システムと環境 (The International Conference on Manufacturing Systems and Environment - Looking toward the 21st Century 略称 MSET21)
 - 2) 主催 (社) 日本機械学会
 - 3) 組織委員長 岩田一明 大阪大学工学部教授
 - 4) 開催期間 1990年5月28日～6月1日 (6月1日は見学会)
 - 5) 参加者 231名 (内、国内187名、国外44名)
国外参加者 (16ヶ国) の内訳は以下の通り
西ドイツ：9、アメリカ：7、イギリス：4、フィンランド：4、中国：3 (内、台湾：2)、オランダ：3、韓国：2、カナダ：2、イタリア：2、インドネシア：2、アイルランド：1、ブルガリア：1、フランス：1、ベルギー：1、スウェーデン：1、ユーゴスラビア：1
 - 6) 国際会議の内容
 - (1) 特別講演
以下の3件の特別講演があった。
“21世紀へ向かってのアメリカの生産戦略”、SME会長 F.Riley Jr.博士
“日本における次世代の生産”、日本電気株式会社社長 関本忠博士
“EC市場統合の製造業に及ぼすインパクト”、フィリップス・インターナショナル ディレクター J.Muntendam 博士
特別講演は、日、米、欧各々の企業トップから、今後製造業が歩むべき道について具体的な例を挙げて説明があり、特に国際化が進展する状況下での考え方について意見が出された。
 - (2) キーノート講演
以下の3件のキーノート講演があった。
“未来形生産の概念と方法論”、シュツットガルト工科大学 R.D.Schraft 教授
“CIMのアーキテクチャー”、日本IBM (株) 原滋夫氏
“生産における人口知能”、ベルリン工科大学 G.Spur 教授
各分野の専門家から、生産関連分野において今後重要となると思われる、研究開発課題、新たな手法や考え方等について、具体的な提案と紹介があった。
 - (3) 研究論文発表
4室に分かれ、以下のセッションにおいて研究論文の発表が行われ、活発な質疑応答があった。発表された論文は、国内49件、国外40件の合計89件であった。
セッション名は以下の通り。
“品質管理と経営”
“工作機械 1、2”
“未来型ファクトリーシステムの概念1、2、3”
“マン・マシン・インターフェース”
“人的要因と意志決定支援システム”
“人的要因と故障診断”

“コンピュータ援用生産管理1、2、3”
“インプロセス計測”
“ロボティクス1、2”
“コンピュータ化されたフレキシブル生産ケ-
ースタディー1、2、3”
“システム設計と設計の方法論”
“システム評価とシミュレーション1、2”
“CIM概念と構成”
“コンピュータ援用工程設計1、2”
“ツーリングおよびプロセス技術”
“先進制御技術”
“ファクトリフロアにおける基礎技術”
“CIMにおける知識工学”
“CADシステムにおける知識工学”
“センシング関連技術”
“先進CADシステム”

なお一部のセッションは集中セッションとし、
十分な討論時間を設定して、関連分野における集
中的な質疑応答ならびに意見交換を行なった。

(4) 機器及びカタログ展示

講演会と並行して、関連機器及びカタログなど
の展示が行なわれた。展示会場が講演会場から離
れていたこともあり、参加者の数は予想より少な
かったが、機器のデモンストレーションもあり、
見学した人には好評であった。

(5) 見学会

海外からの参加者を対象にして、2班に分かれ
て見学会を行なった。A班はオムロン(株)の三

島工場を訪れ、B班は通産省工業技術院傘下の機
械技術研究所及び電子技術総合研究所を見学し
た。参加者は各々、A班が20人、B班が8人であ
った。

(6) ウェルカム・パーティー及びバンケット

5月27日夕刻、開会に先立って立食形式の産ウ
ェルカム・パーティーを行ない、さらに5月30日
夕刻正式のバンケットを行なって、参加者間の親
睦を深めた。

(7) その他

同伴御夫人方のために、都内及び近郊の観光名
所を訪れる御夫人プログラムを実施した。

4. 総括

1990年という、区切りのよい年を選んで、次世
紀の生産システムのあり方を問う国際会議を、わ
が国で開催したことは極めて意義の大きいことで
あった。当該分野における内外のオピニオンリー
ダーが多数参加し、活発な意見交換を行なったこ
とは、この分野における国際的な関心の高さを示
しているといえる。同様の国際会議を引き続き開
催してはどうかという意見も聞かれ、総じて本国
際会議は成功であったといえる。ただし、会議の
性格上、内容が先端的な学問、技術に偏るため、参
加者が先進工業国からの研究者、技術者に限られ
る嫌いがあり、今後この点についての配慮が必要
であろう。